

志賀直哉「犬」 - 炎天下、奈良の町で飼犬を探す

吉川仁子

文学部 言語文化学科 日本アジア言語文化学コース 准教授

飼犬の米^{よね}がみなくなつた事は私を不機嫌にした。然しそのため神経を苛立たす事はもう厭だつた。するだけの事をして、あとは運次第、縁次第。還つて来るものなら、来る、還らなければ、仕方がないと決めた。

このように書き出される志賀直哉「犬」(『週刊朝日』昭和3年1月2日号、執筆は昭和2年9月)は、炎天下、奈良の町を志賀と重ねられる主人公「私」が飼い犬を探し回る話である。志賀は、自作解説「続創作余談」の中で、当時岡本に住んでいた谷崎潤一郎を訪ね、「一緒に神戸に出て、其所で買つて帰つた犬」が、「或時みなくなつて、それを尋ね出した事をそのまま書いたもの」、「週刊朝日」に出ると、間もなく奈良県の警察部の人が訪ねて来て、私は大変礼を云はれた。巡査が私に親切だつた事を書いたので、それを時の警察部長が喜んでくれたのだ」と書いている。

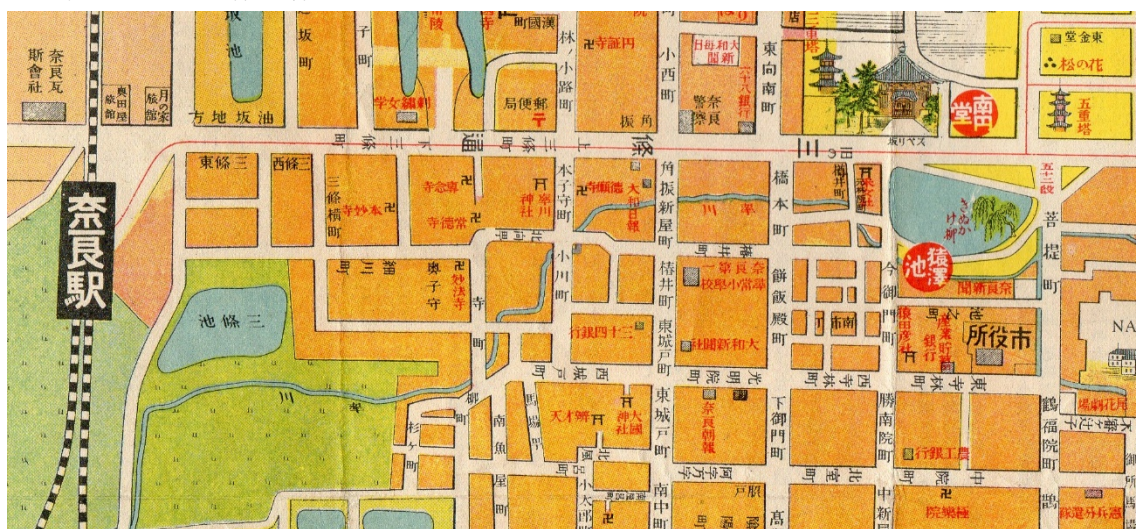
米は、「イングリッシュ・セッターの至極人なつっこい^{たち}性」で「安かつた割に上等な犬」。いなくなった翌日、市役所にいると連絡があり、「私」はまず市役所へ。しかし、そこにはおらず、警察署へ行くと、前日尼ヶ辻の人が犬を奈良駅の交番に届けたが、飼い主がわからないので、その人が一晩預かって、鑑札の番号を調べるために今日市役所に犬を連れてくるはずだったという。驚の滝へ行つた帰りに若草山の辺からついてきた犬が「追つても帰ら」なかったのだそうだ。確かに「人なつっこい」。奈良駅の交番へ行ってみたが拾い主の住所姓名を訊いておらず、それを落ち度と思ったのか、巡査は、「私」が尼ヶ辻に探しに行くと言うと一緒に連れてくれると言う。二人で自転車で尼ヶ辻へ行き、近所の人に尋ねているところへ拾い主が表れ、米と再会という展開である。「贅沢な犬で味噌汁をかけた飯は食はるので、魚を煮てやりました」という拾い主の言葉が、いかにも「上等な犬」らしく、また、飼い主の暮らしぶりのイメージとも重なって面白い。

当時の地図を見ると、市役所は東寺林町(現在のならまちセンターの所)、警察署は三条通と小西通の角(現在の三井住友銀行奈良支店の所)にあった。また、米と一緒に「三条通を真直ぐに、猿沢の池から右へ折れ、漸く自家へ帰つた」とあるが、志賀は、昭和4年に新築の高畑の家に移る以前は奈良市幸町の借家に住んでいた。こうした位置関係を踏まえると、暑い最中、幸町と尼ヶ辻を往復した志賀の姿が彷彿され、さぞ疲れただろうと思う。現在、役所などの位置は変わっているが、帰り道に東を望んでの「坊主の若草山と有髪の春日

山とがよく晴れた空の下に仲よく肩を並べてゐる。」という風景は、今も全く変わらない。

志賀の作品には動物がよく登場するが、彼は実際動物好きで、様々な動物を飼っていた。変わったものでは、熊の仔、狸、小猿なども飼っていたという（『蜻蛉』序）。犬はしばしば作品に登場するが、中には「雪の遠足」（昭和4年）の小犬のように、主人にひどく当たられる犬もいる。犬への態度は、犬の種類や性格によるものもあるが、犬との関係性にその時の作者の心理状態がよく表れてもいる。「犬」には、友達から借りた腕時計を盗まれ、それを首尾よく取り戻したという「私」の過去のエピソードが、「私」にとって「物事が調子よく行」った例として挿入されている。米の発見はまさに「物事が調子よく行」ったハッピーエンドだが、この結末は、現在の「私」が、物事を「運」や「縁」に任せようという、運命に抗わない安定した心を持っていることと無関係ではない。「私」が「これがもう十年前だったら、自分は中々こんなに落ちついてはみられないと思」っているように、場合によっては、物事がうまくいかずに苛立ち、悪循環に陥ることもあるのだ。「雪の遠足」はそうした苛立ちが犬との関係性を描く中に表れている。動物は物を言わないが、だからこそ、動物との関係性は、志賀にとって己の心の状態がそのまま投影されるものだったのではないだろうか。

ところで、この作品には後日談がある。作品発表の五年後、志賀に師事した女性作家池田小菊が共産党シンパの疑いで奈良県警で取り調べを受けた。心配した志賀が夜に警察署長を訪ねると、「犬」の掲載時お礼に来てくれた人が署長だったので、大変好都合で、池田小菊は夜中に無事帰された（「続創作余談」）。この作品は「物事が調子よく行く」力を後日までに及ぼした不思議な作品だ。



『奈良名勝案内図』（昭和4年、駸々堂）。小西町と三条通の角に奈良警察、猿沢池の南に奈良市役所がある。

※ 「月刊大和路ならら」（2018年8月）掲載の記事を一部改めたものである